

時間内に取り上げられなかった質問に講師（佐沢氏、戸田氏）から回答

質問1：手話語りをするときに、例えば「モチモチの木」のように方言や昔の言い方が使われている場合は、どのように表現するとよいでしょうか。

→ **《佐沢》** 私は絵本の文に方言や昔の言い方があったとしても、その場で通じる手話で表現をしてきました。

一例として、北海道には文末に「〇〇べ」「〇〇さ」といった方言があります。そういった方言の存在を情報として子どもたちに伝えることはありますが、手話にその方言を反映させて表現するということはありません。昔の言い方についても同様です。

→ **《戸田》** そうですね。同じく、手話の方言を反映させて表現することはしていません。

質問2：日本語のフレーズやリズムを楽しむような言葉遊び絵本など翻訳が難しく、絵本の読み語りをするときに省いてしまっていますが、そういう本の中でも、「こういう工夫があればその絵本の世界を楽しめる」といった本やアドバイスなどあれば教えてください。

→ **《佐沢》** しゅわえもんのスタッフで色々検討した結果、「しゅわりズム」のように、事前に手話になじむリズムに乗せて、絵本の文を表現するように工夫しています。

例えば「やさいさん」という絵本の場合、

（絵本文） やさいさん やさいさん だあれ <3拍>

♪ / ♪ / ♪ /

ですが、3拍では手話のリズムになじまないので、

（手話） やさいさん やさいさん これ（指さし）だあれ <4拍>

♪ / ♪ / ♪ / ♪ /

このように、あえて『これ』加えて4拍にすることにより、手話のリズムになじむ構成にしました。

また、「やさいさん」のしゅわりズムを行う時は、手話をしながら同時に首を左右にふっています。絵本は語り手の左側に置いているので、首振りも右から始めてしまうと…

（手話） やさいさん やさいさん これ（指さし） だあれ <4拍>

首♪<右> ♪<左> ×♪<右> ♪<左>

上記のように「これ（指さし）」のときに、首は右側に動いているので、語り手の左側に置いている絵本から遠くなってしまいます。なので、「やさいさん」では首ふりを左から始めるといった工夫をしています。

（手話） やさいさん やさいさん これ（指さし） だあれ <4拍>

首♪<左> ♪<右> ○♪<左> ♪<右>

このように手話の自然なリズムを意識した構成で進めることが多いです。

→ **《戸田》** 逆に、手話の音韻やリズムを楽しむ翻訳にするのも面白いと思いますね。手話の音韻やリズムを楽しむ絵本が出てほしいものです。

質問3：0、1歳などの乳幼児から読み聞かせ始めた場合は、手話の環境を作ることにもつながるとおもうのですが、聴覚活用優位の4歳などの子に初めて絵本読み聞かせをして、「何を言ってるかわからない！声！」と言われた場合、どのように対応したほうが良いとありますか。

→ **《佐沢》** 対応に戸惑われているお気持ち、わかります。

お子さんが今後も手話を継続して活用するかどうか、現段階ではまだわからないわけですが、将来的なことを見据えて考えると、手話活用をやめてしまうことでお子さんのコミュニケーションの幅を狭めてしまうように思います。

ですので、「手話での読み読みの時間」と「音声での読み聞かせの時間」を分けるという方法を導入してみたいかどうかがでしょうか。

手話での読み読みの場合は、絵に手話が描かれている「まねっこ おてんき」という絵本や、実年齢の対象絵本よりもやさしい絵本（例：「もこもこ」「まり」など）など、文字の少ない本を選んで読み読みの時間があると良いのではないのでしょうか。手話ならではの、読み読みの時間を楽しめるように思います。

また、人工内耳を装着している場合も含め、子どもたちは視覚から情報を得る力がまだ十分とはいえませんし、視覚活用にも慣れていません。ですので、手話での絵本読み読みの時間を通して、子どもたちに見るだけで楽しめる時間を設けることは非常に大事だと思います。

ただ、その際、子どもたちにとってわからない手話が多かったり、ご質問のお子さんのように、声がないことにストレスを感じてしまう場合もあります。しかし、「まり」、「もこもこ」といった絵本は、大人から見ても、隆起している様子が動物的に見えたり、植物的に見えたりと想像力の膨らむ絵本ですので、年齢を問わず楽しんで頂けるとと思います。このような絵本を大いに活用してみたいかどうかがでしょうか。

→ **《戸田》** 個人と集団での読み聞かせの場合で、対応が異なると思います。個人の場合は、「音声での読み聞かせ」が良いと思います。集団のときには、みんなが等しく情報を得るためにも、「手話での読み読みの時間」としてやると良いと思います。その手話も、音声を出さずに手話のみでやることも、みな等しく同じ条件になります。音声があると、手話が漏れることが多く、聴覚優位の子だけが理解でき、視覚優位の子が理解できないという格差が生じます。聴覚優位の子も、音声がない手話のみの読み読みの時間を見ることが、始めは戸惑うことも多いですが、柔軟に対応していきます。そして、自分のいる世界がさらに広がると思います。

質問4：幼稚部教員をしています。ハロウィンのころに、お化けの絵本、節分のころに鬼の絵本など季節に読む絵本があるかとおもいますが、今のクラ

スにすごく怖がりな子がいて、お化けや鬼、浦島太郎でも玉手箱など何が出てくるかわからないアイテムがある本などはものすごく嫌がって、読ませてくれません。仕方なく、その子がお休みの日にそういう本を読んでいるのですが、何か対策はありますか。

→ **《佐沢》** この対策については、長く幼稚部の教育に携わっておられる戸田先生に現場経験からのご回答をお願いできればと思います。

→ **《戸田》** このようなお子さんを受け持ったことがないので、僕もどう対応すればよいか、分らないです汗。最初に結末を見せてもダメですかね。今は無理ならば、無理せずに、来年、再来年成長するにつれて、変わっていくのを待つしかないですかね。

質問5：地方聾学校幼稚部年少の親です。地方にしては同級生の多い学年なのですが、全員にわかる絵本読み語りになっているのだろうか、と・・・たまに授業を見て思います。何か、コメントをいただければと思います。

→ **《佐沢》** このご質問についても、戸田先生にご回答をお願いしたいと思います。

それから、しゅわえもん主催の「しゅよみカフェ」の絵本読み語りワークショップに先生方がご参加くださったこともございますので、ご興味がありましたらぜひご参加いただければと思います。

→ **《戸田》** 音声に伴う手話だと、手話が漏れて、聴覚優位の子が理解でき、視覚優位の子が理解できないという状況になると思います。「手話読み語りの時間」という設定で、音声を伴わず手話のみで読み語りをしてみると良いかもしれません。先生も、音声を出さないことで、手話のみに集中できるので、変化は必ずあると思います。

質問6：朝の会、帰りの会など、いろんな場面で絵本が出てきますが、先生は声メインのように感じています。手も動き手話もあるのですが……。今日の講演中の動画で、講師の戸田さんや佐沢さんが子どもに質問されていることに、子どもたちも手話で質問する動画を見てびっくりしました。いつくらいから手話のみで対話ができるようになるのでしょうか。手話のわからない子などは、最初はどんなでしょうか。

→ **《佐沢》** 個人差もあると思いますが、多くは2歳児くらいから手話で対話ができるように思います。手話のわからない子どもの場合、最初は自分から手話を表すことは難しいと思いますが、周囲の先生やお友だちが交わす手話での会話や話を見る経験を積み重ねることによって、ことばを蓄積し、対話ができるようになります。

ただし、その前提として、ろうの子どもには手話のある環境が必要不可欠で、その環境が整っていれば、乳児期から手話でのコミュニケーションはとれるのです。デフファミリーの子どもの中には、驚くほど早い段階で自分か

らコミュニケーションをとることができる子もいます。それは、ろうの親が子どもに対して頻繁にコミュニケーションをとっていることが要因として大きく、子どもからも積極的に親に疑問を投げかけたりする様子も見られます。つまり、手話の言語環境なくして、子どもが自然に手話言語を獲得することはできないということです。

また、言語環境という視点で子ども目線から考えると、例えば、対話の内容が理解できていても、手話でなく日本語で答えるよう求められるのが煩わしく、あえて発言を控え、答えないということがあったり、手話であれば自由闊達に発言ができるのにも関わらず、日本語（音声言語）で話すことを求められたり、さらには、たとえ手話で話ができたとしても自分の手話を読み取ってもらえず、受け止めてもらえないことで気持ちが萎えてしまうといったケースがあるようです。手話言語の環境整備の欠如、難しさの一端が示されています。

→ **《戸田》** 年少児でも、手話が分からなくて入学してきた子も、幼稚部における手話言語の環境で1か月も経てば対話ができるようになっていきます。手話言語は視覚言語なので、子どもは聴力の程度に関係なく、手話言語をスポンジのごとく吸収していきます。手話が分からない子も、絵本の読み語りは絵本の絵が理解のきっかけになるので、とても理解しやすく、興味関心をもって見えています。

質問7：絵本を読み聞かせするときの人数、配置、等について、ルールなど心がけていることがありましたら教えてください。

→ **《佐沢》** 半円型に座り、15人くらいが適度かと思います。会場の状況によっては1列ではなく、2重列にして調整します。また、半円型の両端の人にきちんと絵本が見えるよう調整・確認しています。

→ **《戸田》** クラスでの読み語りのときは、だいたい10人以下になります。行事などで、幼稚部全体でやるとなると、20人を超えるため、絵本が小さくみづらくなるので、その時は、大きなテレビモニターに映す方法をとっています。

質問8：3歳児のろう児の親です。絵本はまあまあ好きなのですが、本の対象年齢よりも、下の本を好んで読む傾向があります。もう少し年齢相応の本を読んで欲しいと思って、その絵本を読むと嫌がります。この場合は無理しないほうがいいのでしょうか。

→ **《佐沢》** ご無理なさらなくても良いと思います。絵本に書かれた対象年齢はあくまでも目安です。むしろ、どのような絵本であっても、子どもとたくさんコミュニケーションをとることを心がけると良いと思います。

→ **《戸田》** 佐沢さんの言う通りだと思います。まずは、子ども自身が読みたいということが一番大切だと思います。

質問9：すべては語らない聴者の文化の1つかと思うのですが、「死ぬ（寿命）」という部分を「旅に出る」という表現にしている絵本があるのですが、その場合はそれも含めての翻訳をしいのか、それとも最後に、「実はね」と聴文化の説明を入れるべきなのでしょう。

→ **《佐沢》** ろう文化と聴文化との違いというよりも、「旅にでる」といった抽象的表現は日本文化の一つであり、日本語の魅力と言える部分だと思えます。ですので、日本文化と日本語の魅力的側面を尊重し、手話だからと言って説明しすぎないほうが良いのではないかと思います。

このようなことは、舞台の文学的作品の手話翻訳とも共通している点なのですが、文学的視点から考えると、ハイコンテキストのほうが良いのではないかと感じています。

ご質問の例で言うならば、「旅に出た」とだけ手話で表した後、沈黙の間（ま）の中で、観客自身が「旅」の本当の意味を悟り、余韻をかみしめたほうが良いと考える方もいるのです。語りすぎるとせつかくの作品の魅力が半減してしまう。見え隠れするくらいがちょうど良く、それが文学にふれる醍醐味でもあるわけです。

絵本の読み語りも同様であまり説明しすぎると、かえってつまらなくなることもあるので、適宜、子どもたちの理解度や読み語りに慣れているかどうかなど、状況に応じて対応すると良いと思います。つまり、『旅に出る』で終える場合もありますし、その言葉が理解しづらいといった雰囲気であれば、対話で理解を促すのも方法の一つです。「どこに旅に出たのかしら？」と問いかけて、理解に結び付くよう促す場合もあります。

日本文化と日本語の魅力を活かしつつ、手話でどのように表現するか十分に検討すると良いと思います。抽象的な表現だけでは、子どもたちに十分な理解が得られないときには対話を入れることで、その言葉や意味の捉え方に対して気づきを促すこともあります。

→ **《戸田》** 対象の子どもの発達段階に合わせて、考えていく必要がありますね。子どもの発達段階に合わせて、文学的要素を含んだ抽象的な表現をどこまで翻訳するか。正解はないと思います。

聴児も、絵本の読み聞かせで「旅に出る」と聞いて、それが死ぬことだということを理解できない聴児もいると思います。しかし、聴児の場合は、音声社会のなかでありふれた音声情報により、絵本の時だけではなく、家族の会話、街中の会話、テレビの音声、いろいろな情報が耳から入り、そこで自然に「旅に出る＝死ぬ」ということの偶発的な学習ができていくでしょう。しかし、ろう児の場合は、「旅に出る」という言葉の意味を偶発的に学習することは困難です。ですから、読み語りのときや対話の中で意図的にその意味を学んでいく必要はあると思います。